

書評

K. E. カーペンター

『経済学における対話』

—18世紀におけるドイツ語から

およびドイツ語への翻訳—

Kenneth E. Carpenter, *Dialogue in Political Economy: Translations from and into German in the 18th Century*. Issued on the occasion of an exhibition in the Kress Library, Kress Library Publication Number 23, Boston 1977, 95 pp.

1

思想の国際的普及の形態としては、まず翻訳が考えられるのに、翻訳についての思想史的研究は、ほとんどない。一方では、思想あるいは学問とは、もともと国際的なのだという幻想があり、他方では、翻訳とは、中立的な媒体であって、これ自体は研究にあたいするような独自の性格をもたないという、幻想があるためだろう。しかし、明治初年の J. S. ミルやホップズの翻訳をみればわかるように、異種の言語と文化のなかに思想がはいてくるときには、意識的あるいは無意識的に摩擦と変容がおこることはさげがたいのであって、それを検証する一次資料が翻訳なのである。

翻訳の思想史的研究には、内がわからずと、外がわからずともいうべき、ふたつの方向がある。内がわからずとは、たとえばアダム・スミスの思想の、ドイツへの流入過程をたどるばあいに、翻訳の検討によって摩擦と変容をとらえる方向であり、このように翻訳の内容に立ちいるやりかたは、個別的専門的な研究とならざるをえない。外がわからずとは、特定の言語圏相互間で(時期を特定してもいい)、いつなにが翻訳されたかについての、大量的書誌的研究であって、これは主としてライブラリアンの仕事である。もちろん、「なにが」は、「いかに」とむすびつくことが必要であり、ある著作の翻訳は、それを取りまくその国の出版状況(翻訳をふくめて)から、きりはなしては検討できない。たとえば、ガルヴェによる『国富論』の翻訳を、かれのそのほかの翻訳活動からきりはなすことはできない。このようなばあいには、訳者や出版社についての研究が、内がわと外がわとにわけたふたつの方向を、むすびつけることになるだろう。

統一がのぞましいことはいうまでもないが、そのことは分業を否定する理由にはなりえない。まして、この展示目録の編者カーペンターがいつているように、翻訳書誌は、文学関係の若干をのぞけば、きわめて貧困なので

あるから、ここで18世紀ドイツについてこころみられたような調査が、さらに深化され拡大されることは、思想史研究とくに比較思想史研究にとって、のぞましいだけでなく必要不可欠なのである。まえがきで編者が、この目録は、もっとおおきな翻訳書誌の計画を基礎とするものであり、その書誌では、訳者および翻訳についてのコメントがつけられるはずだと、かいているので、それを期待しながら、氷山の一角ともいべきこの目録(36点69ページ、編者序文24ページ)を検討しよう。

2

編者は序文で、翻訳書誌は、多国語的でなければならず、現物を直接に点検したものでなければならぬといっている。翻訳には重訳がふくまれるから、多国語的でなければならぬことはいうまでもないが、現物の直接点検は、翻訳書誌にかぎらないのではないだろうか。翻訳と原書とのちがいをしらべるとは、たしかに翻訳書誌特有の作業であるとしても、ほんとうの新版か、旧版のままで扉だけつけかえたものかという問題は、原著についてもおこりうるはずである。

そういう一般論をべつとすれば、序文は主として、ドイツを中心とする18世紀の翻訳書の特徴をのべている。

編者によれば、18世紀ドイツは、後進国意識からイギリス、フランスの思想と技術の輸入に努力し、産業スパイまがいのことまでやったが、そういう努力のひとつの表現が翻訳であったことはいうまでもない。とくにそれは、18世紀後半において顕著であった。だが、それでは、ドイツの出版物のなかで、翻訳がしめる比率がどのくらいであったかという点、ファビアンが指摘している1769~71年についての調査では、ドイツの全出版物4,709のうち、翻訳が701で、ほぼ15%をしめるが、1794年にエルシュが、翻訳の割合を3分の2としているのとくらべると、差がおおきすぎて、25年の差ということだけでは説明がつかない。ハインシウスおよびカイザーの書誌は、ドイツの全出版物を収録することを目ざしながら、じつは約20%にとどまっているので、統計の基礎となりえないのである。

フンバートの『官房学書誌』は、有益だが不完全で、翻訳を軽視する傾向があり、クレス、ゴールドスミス両文庫は、英訳をのぞく翻訳にかんしては、実態を反映していない。これに反して、メンガー文庫は、1750~99年のドイツ語経済学書のうち、約15%の翻訳をふくむが、メンガーは学者集書家として、翻訳より原著をこのみ、また実務書より理論書をこのんだであろうことを考

えると、この比率は、やはり実際よりひくいであろう。ただ、それは1772年の調査と一致するので、15%をミニマムとみることができる。これは、現在のドイツの連邦共和国における比率(1971年に10.65%)などからみて、かなりたかいものといえる。

全ヨーロッパ的に、18世紀は、ラテン語による統一文化が崩壊したあとを、翻訳によって再統合しようというくわだてが、啓蒙的世界市民思想にささえられて活潑化した時期であるが、とくにドイツでは、前述の後進国意識が、それをさらに促進した。では、どこをまなぶべき先進国とみなしたかという、翻訳の面で見ると、イギリスではなくフランスであった。その理由としては、フランスの文化的優越がみとめられていたこと、フランス語の知識が普及していたことがあげられよう。ただ、そのことがただちに、編者がいうようにフランス語の媒介的役割(フランス訳からの重訳)にむすびつくわけではない(なぜ、フランス訳自体がおこなわれたかの説明がない)。

イギリスが、先進国としてみとめられていたにもかかわらず、そこからの翻訳が、フランス語からの翻訳よりすくないのは、内容的にいえば技術の面でフランスがすすんでいたためもあるが、それ以上に、イギリスの著作は、イギリス特有の政治形態(混合王政)を前提としていたり、イギリス特有の時事問題(たとえば穀物法)をめぐる論争であったりして、そのままではドイツにとって受け入れにくいものであったためである。こういうばあいには、訳者による原書内容の変更・加筆(注記)がおこなわれる。

上記2国のほかは、スペイン、オランダはともに重要性を減じつつあり、イタリアは、翻訳者が稀少で、主としてオーストリアをつうじて文化輸入がおこなわれたにとどまり、スウェーデン、デンマーク(とくに後者)が、比較的緊密な文化交流相手国であった。逆にドイツ語からの翻訳は、デンマーク語訳、ユスティとゾネンフェルスの著作、および鉱山技術書の外国語訳をのぞけば、きわめてすくなかった。むしろ、フリードリヒ大王、ピールフェルトなどのように、ドイツ人がフランス語でかくことも、まれではなかったのである。

3

序文のIIは、翻訳がだれによって(したがってまただれのために)おこなわれるかについて、5つのケースをあげて、それによる翻訳の性格を検討する。すなわち、訳者が、1. 受容国の人間であるばあい、2. 供給国の人

間であるばあい、3. 著者であるばあい、4. 国境地帯住民であるばあい、5. 亡命者であるばあいであるが、この観点は、それ自体として意味があるとはいえ、当面の問題であるドイツ訳の性格について、とくに重要な視点を提供するものではない。その問題については上記のような訳者による変更の方が重要であり、それはIIIであらためて言及される。

編者によれば、訳者が原著内容を変更(取捨選択)することは、当時においては、めずらしいことではなく、かえってそれによって、訳者は読者にたいして必要なもの(読むにあたいするもの)だけを提供するという、サービスをしたのだと考えられていた。しかし、ドイツ訳のばあいは、それだけが変更の理由ではないことは、すでにのべたとおりであって、その証拠には、先進国イギリスでは、外国書の翻訳は、外国からまなぶためではなく、外国について実情をしるためのものであったから、内容の変更は必要とされなかったのである。

後進国の先進国への依存と対抗の関係が、翻訳だけでなく思想の輸入全体に、どういうゆがみをあたえるかは、たとえばアダム・スミスのばあいについて、よくしられているが、編者は、national insecurityということばだけで、それを表現しようとしたらしく、この点はあきらかに説明不足である。「訳者は……外国の著者と対等の地位にたとうと努力しているかのようだ」といってしまえば、問題を訳者の個人的事情に解消するおそれさえ感じさせる。

そのうえ、編者は、ドイツ訳における原文変更を、支払いが印刷ページできめられたという事情からも、説明しようとしているが、これもまた、それ自体としては興味ある指摘だとはいえ、十分に説得的な説明とはいえない。たくさんかきさえすれば、収入がふえるというならば、そもそも翻訳である必要はなく、したがって、原文変更とは関係がないはずである。注は、活字がちいさいから、ページ払いでは割がわるく、このまれなかつたといいつながら、それにもかかわらず注がおおいは、訳者の自己表現欲によるという説明も、説得力を欠く。

以上のように、序文について若干の不満がのこるが、翻訳問題の思想史的重要性を指摘し、じっさいに例示した点で、画期的な労作であり、そこで約束された翻訳書誌の完成が、思想史研究にたいしてさらにおおきな寄与をするであろうことを、期待させる。ただし、小著とはいえず人名索引がないのは、利用に不便である。

[水田 洋]